

昭和二十年八月、二十八歳の源造は終戦をみたかし、ぐんじゆこうじよう三鷹市の軍需工場で迎えた。背が高く痩せ気味で、銃を持つより文学書を持つほうが似合う青年であった。

三鷹市の第四部隊に所属して二度戦地に出向いていたが、この年になって武器補強のために一時帰国していたのが運がよかった。戦地でもこの戦争は日本に勝ち目はないと確信していた源造だったから、敗戦のショックよりこれで自由になれるという喜びの方が大きかった。戦地に残っている仲間のことを気にしながらも、ただちに故郷に帰ってこれからの生活に備えたのである。

嫁ぎ先が信州 や山梨の大きな農家だったから、食料を手に入れるのに苦労はなかった。リュックを担いで満員電車に乗り込み、運べるだけの食料を持ち帰った。そして、それを飲食店や食料店に卸した。一般家庭を相手にしなかったのは、一度に多くの量を裁くためだった。湯飲み一杯のぜんざいや、底に五、六粒の米があるだけの雑炊に長い列ができる時代である。源造の思いつきは見事に当たった。闇商売の取り締まりが厳しくなる中で何度も危険な目に合いながらも、源造は着実に現金を増やしていった。そして、二年後にその仕事から手を引いた。次に考えたのは、この東京にどつしりと根を

亡き両親の残した土地と家を処分し、再び東京に出てくるのに十日もかからなかった。ふたり二人の妹たちも遠くに嫁いだ後で、故郷に未練はない。故郷を捨てる代償として手にいれた幾許かの現金を握りしめて、東京で一旗上げることだけを考えていた。

東京は戦後の混乱の真っ只中だった。戦火を浴びて焼け落ちたままの建物と、その周りをただうろつくだけの人の列がどこまでも続いていた。源造は上野の駅前に何日も泊まり込み、その光景を冷静に眺めていた。そして、手取り早く手元の現金を増やす方法を思いついたのだった。次の日から源造は買い出しに奔走した。妹の

下ろすことだった。警察に顔を知られている都心を離れて、東にいたものの、まだあれ果てたままの空き地があちこちに残っていた。源造は吉祥寺の真ん中の土地をかなりの広さで買い取り、そこに二階建ての木造アパートを建てた。そして、あかつき荘と名付けた。当時としては珍しく、あかつき荘には一部屋ごとに炊事場が付いていた。雑誌で見たアメリカのアパートの真似をしたのだったが、そのことが

好評で建設中から入居希望者が殺到した。相場より高い家賃にもかかわらず抽選で入居者を決めなくてはならなかったことが話題になって、地元の新聞に大きく取り上げられたりもした。

源造はあかつき荘を建てたことで吉祥寺で一躍有名人になったのである。

あかつき荘が完成すると同時に、故郷から大川芙美を呼び寄せ、一階の一部屋に管理人として住ませた。それが源造と芙美の結婚生活の始まりでもあった。

芙美は貧しい農家の五人兄弟の三番目で、源造とは幼馴染みだった。幼い頃から

だということをも十分に承知している女の強さだったのかも知れない。

芙美がこういう女だったからこそ、源造は安心して仕事に没頭できたのである。

源造はあかつき荘を建てたことで実業家としての第一歩を踏み出し、芙美の支えによって名実ともに吉祥寺の実力者に押し上がってきたのだった。

「そうだったのですか」

源造の話聞き終わったとき、栄子は一種の感動を込めてつぶやいた。

「この屋敷は伯父さんが伯母さんのために

引つ込み思案の性格で、近所の子供たちによくじめられていたのを源造が庇ってやり、ずっと源造兄ちゃんのお嫁さんになると思い込んでいた。源造にその気はなかったが、女手が必要になったときにそのことを思い出して呼び寄せただけだった。

金儲けに夢中で家庭を省みる余裕のない源造にとつては、芙美はまことに都合のいい嫁だった。何日も家に帰らなくても一言の文句も言わない。身体が丈夫で、座っているより動いていたほうが性にあっているから、管理人の仕事をこなしながら近所の子供たちを預かって面倒を見たりしていた。ここを追い出されたら行くところのない身

建てたんだって母から聞いています。伯母さんへの感謝の気持ちの現れだったんですね」

「お母さんはそんなことを言っていたかね。子供が二人生まれてあかつき荘では手狭になったからここへ移ってきただけのことだよ」

「いいえ、誰もが驚くほどの広さと設備を備えた家に、行儀見習いの女の子を三人も住ませたって聞いています。今でも凄い屋敷なんですよ、伯母さんは嬉しかったでしょうね」

「わしは随分好き勝手に生きてきた。芙美はよく耐えてくれたと思っているよ」

そう言ったときの源造は本当にいい顔をしていた。夫婦で協力して今の地位を手に入れたこ

と、その記念にいつまでもあかつき荘を残しておきたいという気持ち自然と伝わってきた。

「夫婦っていいものだよ。栄子もまだ若いんだから、機会があれば再婚のことも考えてみればいい」  
栄子を見る目に労わりと励ましがあつた。

いつかそんな日がくるかもしれないし、こないかもしれない。今は、そんなことよりも、源造と芙美のためにこのあかつき荘を守っていききたいという思いのほうが強い。

栄子は雑巾を持つ手に力を入れて、廊下の拭き掃除に取りかかった。

4

もすぐにその子たちが集まる公園に出かけて行く。栄子がいっしょに行くのを嫌がるのは、友達にからかわれるのが原因らしい。  
「圭太君がね、直哉は新米だから位がないって  
いうの。だから武器も持たしてくれないんだよ」  
「信ちゃんって四歳の子なんだけど、僕より古いから位が上なんだってさ」

直哉の話の話を聞いていると、圭太というのがりーダー格の男の子で、その子を中心にして子供たちの集団社会ができていようだ。時々遠くからようすを伺うと、圭太の命令を受けて真剣な顔をして動き回っている直哉の姿があつた。  
二カ月前に比べて体も一回り大きくなつたよう

七月になつてから愚図ついた天気が続いている。空梅雨で終わりそうだと思つたとたんの長雨だつた。

あかつき荘の管理人になつてから一カ月、栄子も直哉も新しい暮らしに馴染んできた。大きな家具や日頃使わない道具を空き部屋に入れたために、管理人室兼住居となつた部屋も狭いながら使い勝手よく落ち着いている。

直哉は源造に紹介された幼稚園に通い始めた。少人数のークラスに三歳から五歳までの子供がいる家庭的な幼稚園である。兄弟のいない直哉は初め戸惑つたようだったが、年上の男の子の活発な遊びが気にいって、幼稚園から帰つてから

な気がして、栄子は頼もしそうにその姿を眺めていた。  
しかし、この数日直哉の機嫌が悪い。雨のために公園へ遊びにいけないからだつた。

その直哉の相手をしながら栄子も苛立っている。雨で洗濯物が乾かない。部屋の隅にロープを張つてしのはいはいるが、いつまでも湿っぽさが抜けなかつた。このままでは部屋中が洗濯物に占領されるのも時間の問題である。

洗濯物に向けて扇風機を回しながら、栄子はふと二階に乾燥機があることを思い出した。階段を上がつたところに少し広いスペースがあり、全自動洗濯機と乾燥機が一台ずつ置かれている。

アパートの中にコインランドリーがあることに初めは驚いたが、二階の各部屋には洗濯機さえ置く場所がないことに気が付いてなるほどと思つた。

栄子もこの住人であることに代わりはない。それにお金を入れるのだから誰が使つても構わないようなものである。しかし、もし使つているところを誰かに見られたらと思つと二階に上がつて行くことに抵抗があつた。

源造に紹介されて一応住人の顔と名前を覚えたが、栄子は誰とも親しく言葉を交わしたことがない。管理人として住人の世話をしようとは張り切つていたのに、気持ちをはぐらかされた

思ひだつた。

今まで住んでいたマンションは、同じ階の住人とそれなりの付き合いがあつた。同年代のサラリーマン家庭だつたし、子供を通じての親交もあつた。あかつき荘の住人はそれぞれに年代も職業も違つている。そして、栄子が管理人という立場にある以上、今までのような付き合いを望むほうが無理なのかもしれない。しかし、何か用事があるときしか顔を合わさないとこのも何だか寂しいことのように思ひ始めていた。

直哉が昼寝から目を覚ました。雨は一向に弱まるようすもなく、ますます激しくなつて窓ガラスを叩き付けている。

その雨足を眺めながら、栄子は二階に上がつて行こうと決心した。

栄子自身この部屋に閉じこもつて息苦しきを感じてきたこともあるが、これを機会に二階の誰かと話をしてみようと思つたのである。向こうから来るのを待つていただけでなく、自分のほうから近づいて行こうと考えた。そうでもない和管理人を引き受けた意味がない。

片手に洗濯物を入れたカゴを持ち、もう一方の手で直哉の手を引いて栄子は階段を上がつてつた。

(以上11月11日放送分)